

有機技術通信

トピックス

- 有機農業技術の骨格
- 第2回有機農業技術総合研究大会のご案内

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

有機農業技術の骨格

有機農業技術は、単なる無農薬・無化学肥料栽培のための技術的ノウハウでも、有機JAS規格クリアのための技術集積でもない。

有機農業は、自然の摂理を活かし、作物の生きる力を引き出し、健康な食べものを生産し、日本の風土に根ざした生活文化を創り出す、農業本来のあり方を再建しようとする営みである。それはたとえば環境論的な倫理価値のために、農業の実際的な利を捨てるということではなく、有機農業の取り組みは、環境、食、暮らしに係わる倫理と利を同時に実現していく農業本来の王道を行こうとしている。

有機農業技術はそのような有機農業の取り組みの中から創り出され、また、そのような有機農業を支え発展させていくための技術群に他ならない。この点で、自然との結合から離脱し、外部からの資材導入に依存していく近代化慣行農業とは、技術路線において根本的に異なっている。

中島紀一（有機農業技術会議副代表）

有機農業において基本的前提となる事項としては、農薬や化学肥料、遺伝子組み換え技術を使わないという3点が挙げられる。

さらに成熟した有機農業において共通して確認できることとして以下の諸点が挙げられるだろう。

- ① 工業製品などの外部からの投入資材にはできるだけ依存しない。農場や農場周辺の自然や社会の範囲内での資材活用、できれば循環的活用を志向する。
- ② 農業の基本を総合的な土づくり、すなわち圃場の安定的でかつ生産的にも活力ある生態系形成におく。圃場の生態系は出来るだけ壊さず、時間をかけて育てていくことを目指す。生態系は基本的には生態系自体の運動と力によって自己形成されていくという認識を基本とし、人の役割を自己形成を助け、適切に誘導していくことにおく。作物栽培自体も生態系形成にできるだけ資するように組み立てていく。

第2回有機農業技術総合研究大会

今回は北海道での開催を意義づけるため、有機農業が大面積でも可能なかどうかを中心課題として、より具体的な討議をします。大面積で有機農業に挑んできた農家の努力をもとに、様々な視点で「大規模有機農業の可能性」を探っていきたくと願っています。

シンポジウムでは、稲作、野菜作、ダイズ作における大規模有機農業の成功事例および北海道立農業試験場からの技術開発の報告を受けて、今後の技術開発と規模を拡大するための諸条件を議論し、大規模有機農業の可能性を探ります。

さらに、稲作、畑作、畜産、堆肥・土づくりの4つの分科会に分かれて、座長等の話題提供をもとに、参加者と意見交換をします。

畜産分科会では、牧草100%で育てた肉牛や地場の飼料米で育てる取り組みなど各地での実践報告をもとに、様々な観点から日本型畜産の将来について議論を行なっていきます。畜産飼料の現状は地球規模で言えば、

日時 2008年3月21日（金）
場所 酪農学園大学
参加費 3000円（賛助会員は1000円引）

詳細につきましてはウェブ
サイト www.ofrc.net
をご覧ください。

日程

12:00～	受付
13:00～13:30	開会・来賓挨拶
13:30～13:50	基調講演「有機農業の技術確立と有機農業技術会議の役割」
14:00～16:15	シンポジウム「大規模有機農業実現の可能性を探る」
16:30～18:45	分科会「稲作、畑作、畜産、堆肥・土づくり」
同時開催	3月21日 酪農学園セミナー、農管管弦楽団演奏
	3月22日 農を変えたい！全国集会在北海道
	3月23日 全国有機農業生産者懇話会

フードマイレージと温暖化の関係、土壌関係では、輸入飼料が家畜を介して土壌還元される硝酸態チッソなど肥満化、動物福祉では、濃厚飼料多給による病畜の問題などです。それらをトータルで軽減し、日本の畜産が継続していくためには、地域にある飼料・粗飼料の活用ですが、それを具体的にすすめていくためのアイデアを出し合い、各地に持ち帰っていただければと思います。

- ③ そのためにも適切な低投入、土壌－作物栄養論的には適切な低栄養を基本としていく。施肥だけに頼ることをせず、施肥には循環促進的な補助剤としての位置付けをしていく。
- ④ 作物の生理生態的特質を適切に把握しつつ、作物の持つ本来の性質を活かし、作物の生命力を引き出ししていくことを栽培技術の基本におく。そのためには、低投入、低栄養は基本的な条件となっていく。一般論としては、根の張りの良い作物生育、疎植によるゆとりある生育環境の確保が重要な意味をもつ。作物の生育においては、セルロース生産（体の骨格作り）、タンパク生産（体の中身作り）、デンプン生産（エネルギーの蓄積）が生育ステージに応じてバランスのとれた展開をしていくことに留意する。
- ⑤ 病虫害対策は、健康な作物生育の確保、安定した圃場生態系の確保によって病虫害多発の原因を除去することを基本におき、ある程度の発生があったとしても、圃場における天敵や作物自体の治癒力に依存して問題解決を図る。また、病虫害の発生等を単年度の事象として捉えず、長期的な安定生態系形成の視点で見ていく。
- ⑥ 雑草対策については、現状ではまだ多くの問題を残しているが、雑草の生育力は圃場の生物的活力を示すものと理解し、雑草生育自体を敵視しない。雑草は多種の野生植物の群集であり、そのあり方は生態的な変化のなかにあることを適切に認識していくことが必要だろう。その上で、雑草と作物との競合を回避し、作物生産と雑草生態がともにより良い圃場生態系を形成していくような技術方策の構築を目指す。
- ⑦ 圃場および圃場周辺の生き物の多様性に配慮し、生物多様性の保全に支えられた安定した生態系とその活力によって農業生産が安定的に展開していくという方向性のある技術方策の構築を目指す。
- ⑧ 作物栽培に当たっては、地域の自然条件、気候条件、伝統的な農耕体系、品種の選択、生産物を美味しく食べる消費者の食のあり方、生産における危険分散等々を多面的に配慮した、その土地に馴染んだ作型の確立を重視する。そのような作型とその経営的組み合わせこそ総合的な農業技術の結晶であると考えらる。
- ⑨ 農業経営のあり方としては、複合経営を基本とし、それをより能動的に組み立て、展開していくためにも畜産の包摂、畜産との適切な連携、すなわち畜産複合農業の構築を目指すことが必要である。
- ⑩ 種採り、育種については、農家自身がこの領域の技術を自らの技術として獲得していくことの意義を重視する。これは農がいのちの営みであることを農業者自身がしっかりと捉えていく上でたいへん重要な課題である。また、品種改良については、単なる生産性や耐病性、あるいはその他優良形質の導入というだけでなく、有機農業で作りやすい品種、根の張りの良い品種の作出、さらには伝統的な文化価値としての在来品種の適切な保全などにも配慮していくことが必要である。
- ⑪ 有機農業は豊かな食と結びつくなかで発展、充実していく。有機農業と結びつく食は全体食を志向しており、いのち産物としての農産物はできるだけその全てを美味しく食べていくことを望みたい。有機農業はそのような食のあり方とそれに則した食の技術の高まりと共に展開していくことが望ましい。
- ⑫ 有機農業において労働の意味はたいへん大きい。人は農作業（労働）を通して作物、土、自然と交流していく。農作業は農業者の感性を育て、作物や田畑を丁寧に観察していくプロセスでもある。有機農業においては労働は単なるコストとは捉えず、そこに積極的な意義をおいている。有機農業においては農作業が喜びと発見と充実のプロセスとして編成され運営されることを願っている。したがって有機農業においては近代農業のような単なる省力技術は追求されない。もちろん多労であることだけに意義をおくものではないが。
- ⑬ 農業は本来個々の圃場や経営だけで完結するものではない。特に日本の場合は、零細分散錯圃制という地域農業体制の下にあり、農業の地域的な展開の意味がたいへん大きい。また、有機農業が依拠する生態系は原理的にも地域生態系として存在している。有機農業圃場自体が地域の農業生態系の一部を構成していると考えらるべきだろう。さらに、生物多様性の視点から重要視されている里地里山の保全にとっては、そこでの適切な資源利用と結びつけることが重要であることも明らかにされている。有機農業における里地里山に依存した資源利用はその意味からもたいへん重要な意味をもっている。こうした取り組みを地域的に広げながら、地域の自然、地域の林野とも適切に結び合った地域農法の形成と確立を目指したい。
- ⑭ 有機農業は、その時の生産だけでなく、5年後10年後そして100年後の農の豊かな展開を願って取り組まれている。その取り組みは、過去の数十年、数百年にわたる農人たちの暮らしとしての農の営みを継承したいと考えている。その意味で有機農業は広義の文化形成の活動であるとも言える。したがって有機農業の評価にあたっては、こうした長期の視点、世代を繋ぐ農の継承という視点、さらには文化形成の視点も欠かすことはできない。

『有機農業研究年報Vol.7』有機農業の技術開発の課題』
日本有機農業学会 編 (2007) コモンズ より

有機農業技術会議事務局

〒390-1401 長野県東筑摩郡波田町5632

(財) 自然農法国際研究開発センター

農業試験場 内

FAX:0263-92-6808 E-mail: office@ofrc.net